

ニューズレター **BEYOND** ビヨンド07 Summer & Fall

●発行日 2007年11月25日 ●発行者 西郷純一 ●第19号 ●News Letter for WAJC/JCCCW/WWJM/西郷を支える会

人生2周目への挑戦

●「うわー、この人、年寄りーッ！」それが、42年前、私が、後に信仰の大恩人となる中原幸茂師と最初に出会ったときの印象であった。当時、彼は55、私は高2、17才であった。歳月は瞬く間に過ぎ去り、同師は既に天に帰り、気がつくとい私は、その時の彼の年を越えて、去る10月27日に、59才となり、来年は早くも還暦。人生2周目に入る。

●そんな中、引き際の大切さを知りつつも、最近では、70才を過ぎてから米国大統領職という大任を2期も務めた「R・レーガン氏」、また、96才を越えて数年先までの予定表を一杯にして国内外を飛び回っておられる「日野原重明氏」のことを目標にくお二人とくらべるのは、余りにおこがましいが、それでも、私なりに一念発起で頑張ろうと考えている。

■そんな私が、今、戦っている挑戦が2つある。

●第一は、「億劫(おっくう)病」との戦いである。最近、大きいアイデアを語るのには良いが、細かいことを、実際に、地道に行うことに「億劫」さを感じるようになってきている。

●同年配で、既に指導的な立場におられる方とは違い、私は、ここワシントンの地で小さな「開拓教会」の牧師である。まだまだ、会場のイス並べから始まって、いわゆる「小遣いから社長まで」が求められる現状も事実である。

●「ビジョンの人」などと煽てられ、幻を掲げ、方向を指差し、アイデアを提供しているだけでは、事は何も進まない。実際にそれを「実行する」人が必要である。しかし、それを「する」人がいつもそばにいるわけではない。そんなとき、事の大小にかかわらず、否むしろ、小さいほど「億劫」がらずに、「自ら」地道に積み上げ、緻密な努力をする必要がある。しかし、近頃、それを「億劫」がる自分を発見する。

●思えば、姉と私が、導かれて入信した頃、母教会である久我山宣教会は、まだ開拓されて間もない10名にも満たない「家の教会」であった。その教会の最初の献身者として、訓練を受け、副牧師として仕え始めた頃、教会は漸く20名ほどになっていた。冒頭に記した中原師の卓越した霊的な力を基に、教会は徐々に成長していき、やがて100名規模の教会になっていくのであるが、同師は、典型的と言えるほど、霊的なことに集中するタイプであったので、教会が成長していくプロセスの中で、「実務的なこと」は、ほとんど任せられていた。会堂建築をしたときも、銀行や建築業者との交渉、法人設立の準備等々を実務的には、皆やらせて頂いた。既に、幼稚園から高校生までで150~200名近くも集まるようになった日曜学校の運営。30名以上に上る同校の教師たちとの毎月曜日の教師会。近くの区民館を借りての200名を超える子どもクリスマス会。毎年60人乗



＜久我山宣教会夏期学校＞

り、貸切バスを3台連ねて、3泊4日で行った子ども夏期学校、等々。それらの一つ一つを、「開拓」するように、ゼロから、緻密な計画と努力を重ねつつ、積み上げて行った。

●「子ども夏期学校」も回を重ねて今年では第8回。参加者18名ほどでスタートしたこのプログラムも、今年では遂に60名を越えた。●「帰国」を主な理由に、毎年ほとんど完全に中心的奉仕者が入れ替わる。今年も例外ではなく、中心に

●つらつらと自慢話のように書き連ねたようで赦して頂きたい。全ては主の恵みであり、霊的なバックボーンとして中原師がおられたからであることは承知しているが、同時に、手足となって具体的に働いて下さった伝道師、献身者の方々が、多い時には7-8名もおられたことが大きな力であった。

●そんな久我山時代の奉仕を振り返るとき、自分が言ったこと、アイデアとして考えたことは、「自分自身でするしかなかった」初期の時代をいつの間にか忘れ、「言えば、誰かがしてくれる」そんな「癖」がどこかで付いていった気がする。

●渡米し、最初の約10年を勉学に専心した後、摂理のうちに日本人人口1000名弱のプリンストンで私たち夫婦を含め4人で最初の教会開拓を始めた。数年で35名ほどになったが、わたしがアイデア、ビジョンとして導かれたことを、忠実に実行に移してくれる栗栖信之先生(当時大学生、神学生)夫妻、D. キンダーバーター先生(当時宣教師候補生)勿論、家内がいた。

●NYの開拓のときは、尚更であった。上記の器方に加えて、キンダーバーター夫人、山中知義先生(当時神学生)、更には、日本



＜NY時代のスタッフと共に＞から鎌野(現谷川)愛姉が児童伝道、事務スタッフとして専念するべく加わってくださった。これ以上の同労者は望めないという強カスタッフたちが、次々に、与えられたビジョン実現のために、ご奉仕の「億劫な」部分をこなして行ってくれました。日本人が圧倒的に多い地とは言え、開拓一年そこそこで60名以上の礼拝出席者が与えられるようになったのは、そのような忠実な同労者・協力者がいたからである。

●いつの間にか、そのような環境に慣れ、ビジョン・キャスティングさえしていれば、誰かがやってくれると錯覚し、最近では、ビジョン実現のために緻密な計画と地道な努力をすることに、自らはどこか「億劫」がるようになって来ている。

●摂理のうちに、この年令になって、ワシントンの地での開拓に召された私に、今、主が求めておられることは、原点に戻ることに、久我山宣教会の開拓時代、献身者時代、若き伝道者時代に戻って、アイデアやビジョンをシェアするだけでなく、「億劫」がらず、謙虚に、緻密な計画と地道な実践を自ら怠らないことだと、自らに挑戦している。(p.4に続く)

WAJC・夏～秋

第8回子ども夏期学校

●「子ども夏期学校」も回を重ねて今年では第8回。参加者18名ほどでスタートしたこのプログラムも、今年では遂に60名を越えた。●「帰国」を主な理由に、毎年ほとんど完全に中心的奉仕者が入れ替わる。今年も例外ではなく、中心に

なって奉仕して下さった方々のほとんどが、昨年の夏以降また今年になってから教会に参加された方々であった。●しかし、今年の大きな感謝は、それら中心的奉仕者の絶対数が、例年より遥かに多いことであった。例年、

私たち夫婦を別にして2-3名であったが、今年はその倍以上。だからこそ「60名を越える」子どもたちのプログラムをこなすことができた。●テーマは「ノアの箱舟」。長い間暖めて来たテーマであったが、多くの方々が色々なアイデアと賜物を発揮して、素晴らしいプログラムにして下さった。●教会内からの中心的奉仕者に加えて、神様は色々な形でその他の奉仕者も与えて下さった。参加した子どもたちの母親、教会員の家族、近隣の高校生のボランティア、そして、今年も宣子(エスター)の友人たち4-5人が、応援してくれた。●毎年のものであるが、参加した子どもたちが、目を輝かせて賛美を歌う姿、食い入るように聖書からのメッセージに耳を傾ける姿に、今年も心躍らせて感激した。

お祭り



<共同制作「ノアの箱舟」>

●今年も、三日間の夏期学校のフィナーレとして、四日目の夕方、「お祭り」が開かれた。●今年は、奉仕者の数が多かったこともあり、例年になく、開始予定時間前に準備万端整った。ホッと安心したのも束の間、朝から晴れ上がっていた空に小さな雲が出始めたかと思うと、正に「一点俄かに掻き曇り」と言う感じで、あっと言う間に暗雲が空を覆った。次の瞬間、堰を切ったように、大粒の雨が降り出した。雨と競争するように、外に準備したフードやゲームのテーブルをすべて、大急ぎで軒下と室内に移した。ここでも奉仕者の多さに感謝。●そんな中、夏期学校に参加した子どもとその家族、友人たち、更に教会関係者等が、次ぎから次と来会。参加者は合計170名にも達した。雨天のために室内となった会場に、所狭しと集まった人々の熱気がムンムンするなか、全員「室内」でも大いに楽しんだ。●プログラムも終わる頃、いつの間にか雨の上がった外に出て、みなで暫し夏の宵を楽しむ。大人と子どもが入り混じっての恒例の子キン・ダンスに興じた後、夏期学校に参加した子どもたちが前に出て、賛美と暗誦聖句の披露。少し薄暗くなり始めた会場に親たちの構えたカメラからフラッシュが閃く。そのまま、子どもたちと大人へのショート・メッセージ。周囲が皆、神に背く環境の中、一人毅然と神に従う「全き人」ノアの生涯に学んだ。●今回夏期学校に参加した60名ほどの子どもたちのうち約50名が、30のノン・クリスチャン家族からであった。●例年なら、これら夏期学校に参加した子どもたちが、再び福音に触れることができるのは、秋のハーベストフェスティバルか、クリスマス祝会であった。しかし、今年は違っている。毎週の「日曜学校」がある。●しかし、それでも、なお多くの子供たちが、どうしても「夏期学校」だけになっ



てしまっている。●続いて、お祈り頂きたい。

新年に始まった日曜学校。その後

●生徒10名、奉仕者5名ほどで、今年1月から始まった日曜学校。その後、まもなく生徒の数は、20名近くになり、奉仕者も今は8名ほどとなった。●集会の「司会」「お話し」も、私を含めて4名の奉仕者で交替できるようになった。●夏休み中は、一時帰国者も多く、出席人数も少し減ったが、秋になってまた、15-20名ほどに戻った。●日曜学校が、年月の経過と共に、単なる「子ども会」のキリスト教版にならないためにも、奉仕者の「霊性」の問題は恒常的に重要である。そのためにも日曜学校の「月例教師会」は一つの鍵となるが、最近土曜日の午前から、日曜日に移したこともあり、以前より落ち着いた時間が取りにくくなっている傾向がある。お祈り頂きたい。

メンバー制・転会

●WAJCでは、これまで諸般の理由から「メンバー制」を曖昧にしてきたが、本年5月遂に踏み切った。●その段階で、これまで当教会で受洗された数名の方々に加えて、何人かの方々転会を表明され、神様がWAJCに託された使命を「一緒に」果たして行くことになった。●今年はまだ新しい受洗者が起こされていない。お祈りを頂きたい。

山口博子コンサート



チャペルタイムでの山口姉

●ゴスペル・シンガーの山口博子姉が、米国巡回の途中にWAJCにもお寄りくださった。●今回は残念ながら「日曜礼拝」にはお迎えできなかったが、火・水曜日の2日間、コミュニティー・センターのチャペル・タイムで、毎回20名ほどのノン・クリスチャンの婦人方を前に30分づつ、また、水曜日の夜も、教会のメンバーを中心に、これも20名ほどの参加者に1時間ほどの「証しコンサート」のご奉仕をして下さった。●どれも小さな集会ではあったが、彼女の生涯にかかわられた主の恵みと、その主に触れられた彼女の人格からの証しがにじみ出ている。●今回、山口姉には、拙宅に3日ほどお泊り頂いたが、個人的なお交わりの中にも大きな祝福を頂いた。

ハーベスト・フェスティバル

●ハローウィンにまつわる様々な習慣のルーツを探る時、そこに「人間が、死後どこに行くのかが分からず、不安でさ迷っている姿」が見えてくる。●「ハローウィン」という名前そのものが、ケルト人の習慣が、キリスト教化されていく中で、カソリック教会が行事化した「万聖節(All Saints' Day)」に因んで、「聖徒 Saints」を意味する「Hallows」から生まれた言葉である。●また、恐らくこれと関連して、今のように子どもたちを中心に、様々な「衣装」を着ると言う習慣の背後には、上記「万聖節」にクリスチャンたちが、「聖徒たち」を思いつつ様々な衣装を着て、彼らの生涯を記念するという習慣があった。●これらのことを思うとき、クリスマス同様、クリスチャンがもっと積極的に「ハローウィン」のキリスト教化に取り組んで行くべきだと思う。●特に、短期で米国に来られる、子どもを持った日本人家族が、米国のどんな行事・習慣よりも熱心



に「参加」「実践」するのが、このハローウィンであることを



と思うと、何としても福音を伝える機会にしたいと思い、今年も「ハーベスト・フェスティバル」と銘打ってこれを実行した。ノン・クリスチャンの家族が7家族(日曜学校関係から2家族、コミュニティーセンター関係から5家族)参加した。そのほとんどが、「お父さん」も一緒。●プログラムは、時節に因んだ「背景」で家族の写真撮影、ゲーム、子ども賛美歌とメッセージ(「死んだらどこに行くの?」と言うお話し)。最後に、コスチューム・コンテスト。茶菓を頂きながらの歓談のときには、ノン・クリスチャンのご家族も、ゆっくりと交わりを楽しんで行かれた。

●この催しの結実のために続いて祈って頂きたい。

新たに火曜日夜の聖研!!

●9月からWAJCのメンバーの一人高力安子姉のお宅で、キャリアを持っておられ、昼間は出られない婦人方を中心とした夜の聖書の学び会が始まった。●同姉はこの地域に長く、また、様々な地域活動にも参加しておられる関係で、出席される方々も、この地に長い方々である。●又、お住まいもメリーランド州とヴァージニア州の境にあるので、どちらの州に住まれる方にも集い易い所。●この集会で、何よりも感謝なことは、参加者が、毎週熱心な聖書の学びへの「渴き」を見せてくださることである。この集会から大きな神様のみ業が起こされるようにお祈り頂きたい。

ホーム・ページ:HP

●上述の高力姉の尽力で、WAJC、コミュニティー・センター(JCCCW)のホーム・ページが愈々充実してきた。神山知久兄もご協力下さり、毎週日

曜日の礼拝メッセージが、ほぼその日のうちにアップされて、聴いて頂けるようになった(カバーページの左端の目次欄から入れる)。様々な行事の写真もこのHPを通してご覧頂けるようになった(パスワードを遠慮なくお尋ね頂きたい)。今後も続いて更なる充実を目指すべく、HPのための奉仕者を尚求めている。皆様にもぜひ、WAJC、JCCCWのHPをしばしば訪ねて頂き、内容を「見」「聞き」「祈って」頂きたい。また、他の方々にもご紹介頂ければ幸いである。

<WAJCのHP>

<http://wajc.org>

「礼拝メッセージは目次から」

<JCCCWのHP>

<http://community.wajc.org>

帰国・他の地域に移られた方々

●この夏から秋に、帰国された方々は、久保誠・陽子夫妻、飯沼綾子姉、三浦裕次・静江、萌希ご一家である。●朝日容子姉は、お仕事で、NJに移られ、最近、



<飯沼姉(93才)とのお別れ>

近くにあるプリンス頓日本語教会に出席を始められ、受洗された。佐藤美帆姉も8月に次の留学先ミズリー州に移られた。毎週木曜日の集会に忠実に出席しておられたウィッテン

バーガーみゆき姉もご主人のお仕事の関係で、ご家族と共にカリフォルニアに移られた。●昨夏私たちのところに滞在された陣内夫妻の関係で今年の夏は、同様に、IMFの研修のために3ヶ月紺野和樹兄が拙宅に滞留され、



(右上の写真は、久保夫妻がご労下さった絆道クラスの最後の日)

主にある良き交わりの時を持つことができた。

その他の報告

●5月には京都の吉田隆先生ご夫妻を迎える●6月NY・VIPのご用●8月霜朋子姉の主催するホームステイプログラムの一行をワシントンに迎え、短い時間であったが、伝道メッセージを取り次ぐ(右の写真)。



●10月14日(日)、礼拝後に有志で恒例のアップルピッキング。●11月11日(日)は、WAJC創立満7周年記念日であったが、特に「特別」行事は行わなかったが、その日、金恵蓮姉とご主人が現在奉仕している韓国教会(メリーランド州コロムビア)の執事を務めておられる李アンジー姉を迎えて、幸いな証しメッセージを頂くことができた。感謝。

コミュニティー・センター 春と夏期コース

●帰国前の最後のご奉仕として、久保陽子姉が、これまでも勝って力を入れて準備をして下さったこともあり、夏期コースの参加者は70名を越え、例年は通常の学期の半数になる夏期コースも、50名近くであった。いずれも昨年を上回る数。●今年に入ってから、1-2ヶ月に一度「事務運営会」を開くようになり、また、中心プログラムである英会話の先生方との「教師会」も、コーディネーターを務めて下さる美奈シート姉の指導で1学期に1-2度もてるようになった。

いずれもプログラムの見直し、改革に役に立っている。●8月11日(土)ヤードセール開催:7月の最終週から9月第2週まではクラスがない。センターとしては完全な夏休みとなる。その間に持たれる上述の夏期学校の開催とその準備のためには丁度良いが、経済面では困難な期間である。そんな中、ヤードセールは大きな助けである。しかし、それ以上に、ヤードセールは、そのための品物の「寄贈」「販売」と言うやり取りの中で、長期・短期に住まれる地域の人々との「接触」のチャンスを作り出してくれる。



秋期コース

●オープンハウス開催:9月始めの2日間、プログラムの説明と模擬クラスを含めたオープンハウスを行った。●秋期コースは、これまでの最高となる



ECC教師会

90名以上の登録者が与えられた。●毎週月~木曜午前の英会話も7クラスとなり、更に、金曜日の午後には、週毎に「ワークショップスタイル」のクラスが新たに始まった。

●それらの英会話クラスのために合計8名の先生方がボランティアでご奉仕下さっている。●英会話プログラムへの参加者が増えているのは、先生方の「質の高さ」である。実力・経験いずれも、一般の英会話教室に優るとも劣らぬ先生方ばかりである。●勿論、キルト、日本語等の他のクラスにも同じことが言える。●もう一つの人気の秘密は、「チャイルドケア」である。かおる師が月~金曜日まで中心になっているが、教会内外から計6-7名の奉仕者が与えられていることも感謝である。●毎週90名ほどの人々が聖書の

メッセージを聞くチャペルタイムのために祈って頂きたい。

経済的・全体的運営

●プログラムの充実とそれに伴う参加者の増員が大きな要因となって、本年の会計は上向きであり、「黒」である。しかし、全体としては、ここ1-2年の「赤」をまだ少しずつ取り戻している状況である。続いてお祈り頂きたい。●今後、尚、プログラムの充実発展に尽力しつつ、同時に国内外からの「献金」による支援の拡大をも求めて行く計画である。●このたびWAJCの新メンバーとなった姉妹が、会計士としての訓練を受けた方で、JCCCWの会計を担当して下さることになったことは大きな感謝である。

今後・将来のビジョン

●現状は、このようにまだまだ予断を許さぬ状況であるが、上述のように、現在のプログラムの確立・発展への努力をしつつ、「地の利」のある今の場所にいつまで留まるべきか、という点を絶えず祈りのうちに吟味検討して行く。●更には、将来的ビジョンである、地域のインターナショナル・コミュニティを含めた保育園・幼稚園・シニアセンターを「柱」とした「教会建設」のビジョン実現のために有形・無形の準備を、視野に入れつつ祈りながら進んで行きたい。主の導きとご介入を祈って頂きたい。

巻頭言続き(p. 1からの続き)

●第二の挑戦は、過去に捕らわれないことである。前項では、わたしも随分「過去」の思い出に触れた。歳を重ねるとつい思い出にふけるようになり、それにしがみつこうようになる。過去に学んできたこと、経験してきたこと、考えてきたこと、それらに付帯する「プライド」がある。更には、そこに「聖書的である」という確信がくっついて来ると、もっと厄介になることがある。

●最近、特に「教会論」についてそれを考えさせられている。全米で3000万部以上売られ、40以上の言語に翻訳された「Purpose Driven Life」の中で、著者リック・ウォーレンは、聖書が「教会」と言うとき、そのほとんどは「地域教会」を意味していると、その重要性を強調する。一方、牧師・神学者・クリスチャンリサーチャーとして有名なジョージ・バーナは、その著書「Revolution」で、反対に、聖書が「教会」と言うとき、それは基本的には「普遍的教会」を指しているのであって、地域教会ではないと強調する。

●それぞれの主張に「文脈」があり、聖書を根拠にしているゆえ、双方とも正しいのであろう。しかし、この2著者への個人的批判ではなく、どこまでも彼等が反映する現代キリスト教界の一般論として、わたしが危惧していることがある。

●今日見る「メガチャーチ」を中心とした「地域教会主義」に「教会の自己中心」が見え隠れしている一方、「ハウスチャーチ」ムーブメントにも、アカウンタビリティのない「個人主義」という土師記的「自己中心」が潜んでいる事実である。

●この二つは、いずれも現代に生きる人々のニーズに答えようとして生まれてきた、文化的影響を負った教会の形であって、そのいずれかだけに、二者択一の普遍的かつ聖書的正

統性を与えることはできない。

●私たちは、「聖書的」と言いながら、実は、しばしば、私たちの過去の伝統・経験・学びの視点を聖書の中に読み込んでいく。しかし、それは必ずしも悪いことではない。否、むしろ、それで良いのである。大切なことは、それだからこそ、聖書的という名の下に自分の教会観を絶対視してはならないということである。むしろ、それを土台・参考にこそすれ、決して、それに捕らわれずに、今の時代、今遣わされている地域に仕えるために、最も相応しい教会形成を求め続けることである。

●ワシントンの教会にご奉仕するようになって、しみじみ思うことは、この教会、また、この地域に住む人々は、教育、教養、文化、社会的地位、職業的意識、家庭的事情、将来の計画、その他あらゆる点で、小器ながら私が、これまで仕えて来た如何なる教会、地域とも異なっていることである。

●そんな当地に相応しい教会を考える時、教会内の「一致」と言う概念さえ、味わい直す必要があるかと感じている。わたしは、団塊の世代である。「一致団結」は、常に金科玉条であった。それは、何がかんでも「一丸」となることであり、それがどんなものであるかという解釈においても、ほとんど「幅」を与えないものであった。「みんなが一緒にいて、和気藹々とした雰囲気の中で、同じ事をして、・・・」と言う具合である。

●しかし、これ(だけ)が聖書が求めている「一致」であろうか？ 教会が家族だとしてこれを考えたい。ある家族が、八百屋、魚屋、町工場のような家業を営んでいたとしたら、この家族にとって一致とは何か？ 長男を頭に、家族全員が、家業のための店員、社員となって支えて行くことなのか？ それも、勿論、典型的な一致と言える。しかし、同じような家業を営む家族で、長男は家業を継いだものの、他の子どもたちは、それぞれ違った道に進んで行ったとしたらどうか？ この家族は「一致」できない、バラバラな家族と言うことなのか？ 家族の一致とは皆で同じことをすることなのか？ この家族にも、別の形での一致があり、家族の一致とはもっと深いところに求められるべきではないのかと思う。(勿論、後者は、「自己中心」と背中合わせであることも忘れてならない事実である)

●教会の一致も同じである。そこは、人が育てられ、巣立って行く場所である(勿論、巣立ちの行く先が、外ばかりとは限らない。自宅、母教会の場合もある)。しかし、それだけに、教会は「一枚岩」であることが最も大切である。即ち、教会が、バラバラになるような多様性の中にも、もっとも一人一人の中に「岩」であるキリストが明確になり、キリストを基礎とし、キリストに根ざし、キリストに夢中になると言う「一致」が必要である。

●いずれにせよ、人生の2周目に入る私にとって、奉仕における第二の挑戦は、団塊世代として生き、また、その時代の教会で訓練され、学び、考え、奉仕してきた私が、それらの「過去」に縛られたり、固執したりせず、かえって、新鮮でオープンなメンタリティーで、今の時代、今の状況、今の対象地域を見直し、最も適切な方法と様態をもって教会建設に当たることである。小僕のためにお祈り頂ければ幸いです。

みなさまのご支援を心から感謝します!!

「西郷純一・かおるを支える会」サポート

●日本からのご支援：(銀行)UFJ川越支店 (名義)西郷純一かおる師の会 (口座)普通 3818778

●日本国内の連絡先：馬場(〒350-1113 埼玉県川越市田町 17-47) ●同電話・ファックス：(0492)41-7048

●米国：西郷純一・かおる(13008 N. Commons Way, Potomac, MD 20854) ●Tel/Fax：240-314-0249 ●EM：saigo@wajc.org / junsai@comcast.net

WAJC への日本からのサポート

●銀行：三井住友銀行銀座支店(026)

●口座：ワシントン・アライアンス日本語教会・普通・7591975

●WAJCのHP：<http://www.wajc.org>

●日本の連絡先：竹内祥隆 電話：042-555-3261

●同住所：〒205-0022 東京都羽村市双葉町 2-16-27

コミュニティ・センターのために

●振り替え口座：「CCP 日本事務所」00100-5-277547

●郵便口座：「CCP 日本事務所」10060-95110331

●銀行口座：三井住友銀行福生支店(697) 「CCP 日本事務所」普通 7342907

●日本事務所(代表：竹内祥隆)〒205-0022 東京都羽村市双葉町 2-16-27

●電話：042-555-3261 ●HP：<http://www.community.wajc.org>